

# 博士論文審査結果の要旨

学位申請者 後藤 幸大

主論文 1編

Lumboperitoneal shunt surgery via lateral abdominal laparotomy.

Journal of Neurosurgery: Spine 20; 1-6, 2019

## 審査結果の要旨

特発性正常圧水頭症 (iNPH) に対する手術治療として、従来から、脳室内の脳脊髄液を腹腔内へと排除する脳室腹腔短絡手術 (VP シヤント) が施行されてきた。近年、脳実質を操作する必要がない腰部クモ膜下腔腹腔短絡手術 (LP シヤント) は、その侵襲性が注目され、施行数が増えている。しかし LP シヤントに特有の問題点として、手術中に体位変換を要するということが挙げられる。通常、LP シヤントは脊髄側カテーテルを腰部クモ膜下腔に挿入するため側臥位で施行する。しかし、側臥位のまま開腹操作を施行するのが困難で、とりわけ肥満患者で難しい。従って、LP シヤントの開腹操作は手術中にドレープをかけかえて体位変換を行うか、或いはベッドを大きく傾斜させるかして施行するのが通常である。

申請者は、この LP シヤントにおける術中体位変換の問題点を克服すべく側腹部開腹法を用いた体位変換を要さない LP シヤント手術を考案し、従来の方法とその治療成績および予後について比較検討した。対象は 2016 年から LP シヤントを施行した連続 28 例で、最初の連続 11 例は通常の方法で LP シヤントを施行し、一方、残りの 17 例は開腹部位を側腹部へ変更した。後者の 17 例は、創部が腰背部の穿刺部と側腹部の 2 か所とし、ベッドの傾斜や体位変換を施行せずに開腹操作を施行した。これらの 2 群の手術時間や合併症などを比較検討した。結果、両群とも手術により症状が悪化した例はなく、両群の比較では側腹部開腹群で優位に時間が短縮された。また、両群の合併症および予後に差はなく、術後の疼痛についても両群に明確な差異は認めなかった。なお手術中に体位変換を施行した 2 例を除いた両群比較においても、側腹部開腹群が統計的優位差をもって平均手術時間が短かった。

以上が本論文の要旨であるが、側腹部開腹法は従来の手術法と比較して合併症に大きな差異はなく、手術時間が有意に短縮された。LP シヤントは脳実質への操作を要ない低侵襲な手技だが、体位変換が煩雑であり、特に欧米では VP シヤントを第一選択とし、LP シヤントを施行しない脳神経外科施設が多い。側腹部開腹法はこれまで LP シヤントの普及を妨げてきた弱点を回避する、簡便かつ安全な手段で、LP シヤントの手術手順を簡素化し、手術時間の短縮に寄与すると考慮される点で、医学上価値のある研究と認める。

令和 2 年 9 月 17 日

|      |    |        |   |
|------|----|--------|---|
| 審査委員 | 教授 | 水野 敏 樹 | Ⓔ |
| 審査委員 | 教授 | 大辻 英 吾 | Ⓔ |
| 審査委員 | 教授 | 橋本 直 哉 | Ⓔ |